

妊娠期における地域・病院・多胎児サークルが協働して行う多胎児支援の検討

名和文香 服部律子 谷口通英 布原佳奈 宮本麻記子 武田順子 坪内美奈 両羽美穂子(大学)
田口由紀子 福士せつ子 小木曾美喜江(県立多治見病院・東1階) 桜井きよみ 日置富佐子(多治見市保健センター) 今井田路代 杉原愛(大野町役場) 服部寛子(羽島市保健センター)

I. はじめに

近年、体外受精や顕微授精に伴い多胎妊娠率は増加しており、出産千に対し、2004年には11.7であったが、2005年には11.8と年々上昇している。岐阜県においても、多胎児出産は増加しており、出産千に対し2004年には13.9、2005年には13.3と全国平均を上回っている¹⁾。さらに、多胎児の育児は非常に大変であり^{2, 3)}、心身ともにストレスが高く⁴⁾、妊娠期からの不安を抱えたまま、育児期を迎える母親も多いため、妊娠期からの母親とその家族のサポートが重要である。

2006年に、「ぎふ多胎ネット」が発足し、多胎児支援活動が活発になったが、未だ増加する多胎妊娠・出産に支援が追いつかない現状があり、早急な対策が望まれる。また、多胎分娩数は増加しているが、地域によって取り組みが様々であり、妊婦にとっての十分な支援に至っていない地域もある。よって、保健センター、医療機関、多胎児サークル、研究者が集まり交流や情報交換に取り組むことで、多職種が協働して行う支援の重要性が浮き彫りになり⁵⁾、2005年より、「プレパママ教室」を開催し、地域と病院、サークルが連携した取り組みを進めてきた。また、多胎妊婦に対して妊娠期と育児期に調査を行い、教室の評価と双子の妊娠・育児について実態を調査している。

II. 目的

妊娠期から育児期における、多胎児の母親とその家族に対する効果的な介入方法を考えること、多胎児支援における多職種間の連携方法について検討することである。

III. 方法および結果

1. 倫理的配慮

調査の参加は、自由意思であり個人は特定されないことなど、文書を用い説明し、同意書の提出により参加の有無を確認した。また、本取り組みは、本学の研究倫理審査部会での承認を得ている。

2. 現地側の取り組み体制

教室は、保健師、助産師、看護師、多胎児サークルが協働して行うため、開催にあたって情報交換し計画した。また、開催市以外の地区からの参加者のみであることが続いたため、今後の教室開催方法について、他の市の保健師、病院助産師・

看護師、多胎児サークル、大学教員が話し合った。

3. プレパママ教室の実施(A市)

1) 経過

2005年から開催され、今年度は、第4、5回の2回(6月、12月)実施した。

2) 趣旨

- (1) 妊娠中から、分娩や育児など正しい情報を得てイメージすることができる。
- (2) 多胎妊婦同士、家族の交流を図り、情報交換や悩みなどの共有ができ、ストレスの軽減につなげることができる。
- (3) 多職種やサークルが協働し、地域全体で多胎児支援を行うことによって、情報を共有でき、いろいろな角度から支援することができる。

3) 実施内容

- (1) 教室の趣旨と今後の支援(保健師)
- (2) 自己紹介(参加者全員)
- (3) 妊娠中の日常生活の過ごし方、分娩と入院生活(病棟助産師、大学教員)
- (4) 育児・授乳・沐浴など、多胎児サークル紹介と育児体験(多胎児サークル)
- (5) 交流会、質疑応答(参加者全員)

4) 結果

(1) 参加者

多胎妊婦とその夫4組、多胎妊婦のみ1名の計9名が参加した。

(2) スタッフ

スタッフは、A病院助産師・看護師、A市保健センター保健師、D保健所保健師、E市保健師、多胎児サークル、看護大学教員である。

(3) 教室についてのアンケート調査の結果

①年齢(表1)

	妊婦本人	夫 (人)
20代	3	1
30代	2	3

②妊娠週数(表2)

週数	人
16~19週	2
20~23週	2
28~31週	1

③教室の開催を知ったきっかけ (表 3)

表 3. 教室の開催を知ったきっかけ (n=9)

	妊婦本人	夫 (人)
保健センターからのチラシ	2	1
病院で勧められた	2	0
市役所で紹介された	1	1
妻に誘われた		2

④教室に参加した満足度 (表 4)

表 4. 教室に参加した満足度 (n=9)

	妊婦本人	夫 (人)
期待通り	3	3
まあまあ	2	1
普通	0	0
少し期待外れ	0	0

⑤知りたかった内容が含まれていたか (表 5)

表 5. 知りたかった内容が含まれていたか (n=7)

	妊婦本人	夫 (人)
ほぼ含まれていた	3	1
大体含まれていた	2	1
あまりなかった	0	0

⑥「疑問や不安は解消されたか」は、全員が【解消された】と回答していた。

⑦将来、サークル活動に参加したいか (表 6)

表 6. 将来、サークル活動に参加したいか (n=9)

	妊婦本人	夫 (人)
参加したい	3	1
特に考えていない	2	3

⑧教室後の交流会についての意見・感想 (表 7)

表 7. 教室後の交流会についての意見・感想 (n=9)

(妊婦本人)
説得力があり、夫と一緒に教えてもらったので、心強く感じた
普通の母親学級では、単胎のことしかわからなかったもので、大変さもわかったが、現実的に考えられるようになった
実際に育てられた方のアドバイスが心強かったし、参考になった
今までより少し不安がなくなり、「どうにか育てていけそうだなあ」という気持ちになった
(夫)
出産、子育てに対してあらためて妻に協力しようと思った
男性の場合の話が聞くことができて良かった
大変だと思ったが、しっかり家事を手伝わないといけなさと感じた
参考になった

⑨今後の育児支援として、行政やサークルへの意見・要望 (表 8)

表 8. 行政やサークルへの意見・要望 (n=9)

意見・要望
双子なので、育児などにかかる必要な分の費用等を少し安くしてほしい
不安が少しでも解消されるように情報がいつでも得られること
情報交換の場があると楽しい
育児サークルの充実や、職場での育児保障の環境を充実してもらう
このようなイベントが他にもあるとよい
いろいろな費用やサービス等の情報が欲しい
特になし

⑩「出産後の夫以外の協力」は、全員が【得られる】と回答しており、「協力できる人」は、実父母 2 名、義父母 1 名、両方 2 名と回答していた。

⑪多胎妊娠を知って感じたこと (表 9)

表 9. 多胎妊娠を知って感じたこと (n=9)

(妊婦本人)
喜びよりも不安の方が大きかった
楽しみの反面、想像がつかない大変さが少し心配
まず、びっくりしたがとても嬉しかった
嬉しい反面、経済的、育児などの不安を感じた
(夫)
正直(何も言えないくらい)びっくりした
何も言えないくらいびっくりした
驚いた

4. プレパママ教室後のフォローアップ

1) 調査対象および方法

教室に参加した妊婦 5 名に対して、参加の約 1~4 週間後に妊娠期の質問紙調査を行った。また、4 名に育児期の質問紙調査を行った。妊婦 5 名のうち 2 名に妊娠期と育児期の両方調査を行った。

2) 調査内容

調査内容は、親族の発言や支援、今後望むこと、医療・行政サービスで役に立ったこと、嫌だと感じたこと、今後望むこと等である。

3) 結果

(1) 属性 (表 10、表 11)

表 10. 属性 (妊娠期) (n=5)

年齢	20 代後半~30 代後半
妊娠週数	19~32 週
妊娠の種類	自然 3 名、不妊治療 2 名
分娩回数	初めて 5 名
家族構成	夫 4 名、夫・義父母 1 名
里帰り分娩	あり 2 名 (産後 1~2 ヶ月)、なし 3 名
産後の手伝い	あり 5 名 (夫、実父母、義母)
キーパーソン	夫・実母・義母・友人

表 11. 属性 (育児期) (n=4)

出生週数	35~39 週
調査時の児の月齢	2~9 ヶ月
出生体重	1900~2500 g
児の異常の有無	なし 4 組
分娩の種類	経膈分娩 2 名 帝王切開術 2 名
分娩・産褥期のトラブル	あり 2 名 (多量出血) なし 2 名
里帰り分娩	あり 2 名 (産後 2 ヶ月) なし 2 名
産後の手伝い	あり 4 名 (夫・実母・義母)

(2) 妊娠期の各質問項目に対する回答 (表 12)

表 12. 質問の回答 (妊娠期) (複数回答 n=5)

質問項目	内容
① 双子とわかった時の妊婦自身の気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・びっくりしたが、すごく嬉しかった ・みんなと違うんだと思うと嬉しくなった ・まったく予想していなかった ・大丈夫かなという気持ちになったが楽しみ ・何てラッキーなのかと思った
② 双子とわかった時の親族からの嬉しかった言葉	<ul style="list-style-type: none"> →あり 4 名 (実父母から) ・「双子が自分を選んできてくれたから、がんばって」 ・「一度に二人なんてすごいね、やったね！」 ・皆が楽しみにしてくれているのがわかった ・「喜び倍増」
③ 双子とわかった時の親族からの不愉快に感じた言葉	<ul style="list-style-type: none"> →あり 1 名 (義父から) ・障害を危ぶむ発言
④ 妊娠中に不安に思ったことはありますか？	<ul style="list-style-type: none"> →あり 5 名 【妊娠初期】 ・リスクが高いといわれたこと ・無事に二人とも育てくれるのか ・精神的にも金銭的にも大丈夫かと不安に思った 【妊娠中期】 ・二人の体重差があったこと 【常に】 ・元気に産まれてきてくれるのか ・育児を昼間一人でやっていけるのか
⑤ 身体上のトラブルの有無	<ul style="list-style-type: none"> →あり 3 名 【妊娠初期】 つわり 【妊娠中期】 健診時に気分不良 【常に】 頭痛、車酔い
⑥ 児のトラブルの有無	→なし 5 名

⑦ 親族の発言や援助で良かったこと	<ul style="list-style-type: none"> →あり 5 名 【夫】 ・「できる限りのことをする。自分のことはする」 ・「適度に息抜きて頑張ろうね」 【夫・実母・義母】 ・おなかを触って話しかけてくれた 【義母】 ・実家が遠方のため何でも打ち明けている ・病院の送り迎え ・「エコーを見るのが楽しみ」 【親族皆】 ・「お母さんの体が元気なら大丈夫」 ・無理をしないようにいつも気を遣ってくれる
⑧ 親族の発言や援助で良くなかったこと	<ul style="list-style-type: none"> →あり 1 名 (親戚から) ・「双子ってことは楽なの？」
⑨ 親族からの援助として望むこと	<ul style="list-style-type: none"> 【夫】 ・夫と子育てを協力していきたい ・子どもの入浴・遊び・買い物 【実父母】 ・入院中の世話、面会に来てほしい ・子どもの入浴・遊び・買い物 ・楽しみに待ってくれればいい 【義父母】 ・楽しみに待ってくれればいい ・仕事を続ける予定なので協力してほしい
⑩ 医療施設や行政サービス、近隣者の発言や支援で役に立ったこと	<ul style="list-style-type: none"> ・教室に参加でき、いろいろな話を聞けてよかった ・教室で、同じ双子を妊娠中の方と知り合えたことや先輩ママの体験談やアドバイス ・出産経験のある友人がいろいろと教えてくれ、助かった ・夫の妊婦バーチャル体験
⑪ 医療施設や行政サービス、近隣者の発言や支援で嫌だと感じたこと	→なし 5 名
⑫ 妊娠・育児中にあれば良いと思う医療・行政サービス	<ul style="list-style-type: none"> ・月 1 回くらい、妊婦さんや子どもを連れて話せる場所があるとよい ・話を聞いてほしい ・親世代と現代では、妊娠中の生活や気をつけた方がよいことなど、理解も違うところがあり、特に多胎妊娠の知識がないので、簡単なことだけ知る機会があればいいと思う

(3) 育児期の各質問項目に対する回答 (表 13)

表 13. 質問の回答 (育児期) (複数回答 n=4)

質問項目	内容
①現在の育児に対する気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・かわいくてしょうがない ・目が離せなかったり、家事が進まなくて疲れる ・睡眠時間が欲しい ・身体がついていかない ・子育ての中身・大変さを知らなかった ・少し余裕ができたので、自分の身体を気遣ったり教育について考えるようになってきた ・生活のリズムがわかってきた ・全部自分でしようとせず、細かい事は気にせず、一人でもできる気持ちでのんびり育児をしている ・親としての責任を感じている
②育児中に嬉しかったこと	<p>→あり4名</p> <p>【2ヶ月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・顔を見て笑うようになった <p>【3～4ヶ月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・託児付きイベントに参加し、息抜きができた ・首が座って寝返りを始めたこと ・色々な育児便利グッズが使えるようになったこと <p>【5ヶ月～】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「かわいいね」と声をかけられることが多いこと <p>【毎日】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体重が増えたこと ・指を吸うようになった ・「アーアーと話す」 ・顔を見て笑うこと
③育児中に困ったこと	<p>→あり4名</p> <p>【1～3ヶ月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・乳房トラブル ・人手が足りない <p>【4～6ヶ月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人で二人を病院に連れていく時 ・人手不足で寝る暇がない、疲労 <p>【7ヶ月～】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・転んだり、物を口に持っていくなど目が離せない <p>【常に】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人のとき、二人同時に泣くと困る
④育児で工夫したこと	<p>→あり4名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なるべく自分が休めるようにしている ・ほぼ母乳なので添い乳メインで授乳をしている ・「パパ大好き子」にさせるべく声をかけている ・便利グッズのフル活用 (ベビーソファ、電動うっかり) ・手抜きや便利な方法を考えたり、聞いている ・昼と夜の生活場所を変え、時間で区別している ・ミルクは二人同時に飲ませ、自分の時間を作る ・夜間は一人が寝ていても起こして同時に授乳する

⑤親族の発言や援助で良かったこと	<p>→あり4名</p> <p>【実父母・祖父母】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・金銭面の援助 ・里帰り中、「自信がついて、帰っても大丈夫って思えるまでいいぞ」と言われた <p>【義父母】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「大丈夫よ」 ・「助けが欲しい時はいつでも言って」 <p>・「家にいて子どもをみているとストレスがたまるから、みておくれから、たまには出かけておいで」</p> <p>【姉・甥・姪】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・細かいことを手伝ってくれる <p>【親族皆】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「かわいいね」 ・「大きくなったね」
⑥親族の発言や援助で良かったこと	<p>→あり2名</p> <p>【実父母・祖母】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ちょっとした病気やケガで、オーバーリアクションをしたり心配するので、たいしたことでもなくとも心配になってくる <p>【義父母】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・来なかったり、逆に来てくれ過ぎて疲れる ・「もう楽なはず」と言われるとノイローゼになる ・余計なことや口出しされるとストレスになる
⑦親族からの援助で望むこと	<p>【夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活費について考えてほしい ・教育的になってほしい ・外出時、子どもをみてほしい、付いて来てほしい <p>【実父母】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時々家に来て、手伝ってほしい ・外出時、子どもをみてほしい、付いて来てほしい <p>【義父母】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大変な時や、疲れた時に手伝ってほしい ・余計な口出しをせず、温かく見守ってほしい、 ・生活費について考えてほしい ・教育的になってほしい ・一人では無理なことも多いので協力してほしい
⑧医療施設や行政サービス、近隣者の発言や支援で役に立ったこと	<p>→あり4名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医療費の免除 (大丈夫かなと思うとすぐに病院に行くことができる) ・多胎児サークルの座談会での先輩お母さんの言葉 ・ヘルパー (低価格で、週に1~2回、1~2時間程度) ・多胎ネットワークの「自分を大切に」の助言で、自分の体調を気遣うことができたこと ・病院 (NICU) が電話で対処法を教えてくれる ・健診時に、双子のお母さんを紹介してくれた ・保健師が訪問してくれたこと

表 13. 質問の回答（育児期）の続き （複数回答 n=4）

質問項目	内容
⑨ 医療施設 や行政サー ビス、近隣者 の発言や支 援で嫌だと 感じたこと	→あり2名 ・保健師の訪問が3ヶ月の間で1回しかなかったこと ・保健センターで、赤ちゃんクラスに参加した時、「赤ちゃんの移動など手伝いますから」と言われていたのに、手伝ってもらえなかったこと ・予防接種時、エレベーターなしの4階で、ベビーカーもダメと言われたこと
⑩ 今後、あれ ば良いと思 う医療・行政 サービス	・定期的な育児相談の訪問（保健センターにはなかなか行けないので、5～6ヶ月でもう一度してほしい） ・託児付き、手伝いつきの赤ちゃん教室の実施（双子も参加しやすいように） ・予防接種時の手伝い ・金銭面の補助（ヘルパー、交通費など）

以上より、プレパパママ教室は、妊婦とその家族にとって、情報を得るだけでなく、育児のイメージ作りに有効であった。また、サークルから生の声を聞いたり、妊婦同士が話すことによって、悩みなどの共有を図ることができた。さらに、教室後の調査によって、妊娠期から育児期にかけての一貫したサポートの必要性が明らかになった。

5. 多胎児家族のつどい（B市）

8、11月の2回実施した。1回目は、B市保健センターにて、ぎふ多胎ネットのピアサポーターが主となり、日頃の育児の悩みや妊娠期の心配事などの交流会を行った。参加者は、多胎妊婦家族2組、多胎児家族3組、B市保健センター保健師、ぎふ多胎ネット、母子保健推進員、大学教員および学生である。ピアサポーターから、たくさんの経験談を聞くことができ、質疑応答も活発にされ、和気あいあいとした雰囲気の中で進められた。

2回目は、子育て支援センターに集まり、食育についての健康セミナーに参加し、その後、交流会も行った。参加者は、多胎妊婦1名、多胎児家族5組、B市保健センター保健師・栄養士、母子保健推進員である。多胎児家族や多胎妊婦の紹介にもなり、保育士とのつながりができた。

6. 多胎児サークルの開催と支援（C町）

1) 未就学児である多胎児とその家族のニーズ把握

未就学児である多胎児とその家族（同意の得られた13組、1組は胎児）に、4年次学生が卒業研究Iとして、家庭訪問援助を行いニーズを把握した。把握した主なニーズは下記の通りであった。

- ・保育料・育児金などの金銭面でのサポート。
- ・人的サポート（入院など1人に手をかけなくて

はならない時にもう1人の面倒を見てくる等）。

- ・安全に遊ぶことのできる場所の提供（天候に関わらず利用できる、見守りの目がある場）。
- ・多胎妊娠や管理入院による母親への身体面・精神面の影響等から、妊娠期からの支援が必要。
- ・育児期の親が妊娠期に必要と感じた援助と、妊娠期の親が必要と感じる援助は異なる（育児期の親は、妊娠中に出産後のサポートや育児資源情報を知らなかったと思うが、妊娠中の親は、目の前の問題である自分や胎児の健康のことが一番の気がかり）。

2) 多胎児サークルの開催（月1回）

保健師としては、参加者主体のサークルであり、自分たちの思いを反映し運営して欲しいと考えて、側面的な支援をしている。具体的には、会場の無料貸し出し、母子手帳交付時に多胎妊婦へのサークルの情報提供、随時サークルの要望や相談を受けアドバイス、時々サークルに参加する等である。

3) 1) で把握したニーズに対する支援の強化

妊娠期の親は、直面している問題が気がかりで、育児期のことまで考えが及ばなくても、出産後の生活や育児資源の情報が必要ないというわけではない。後になって自分で見直すことができるよう口頭だけでなく資料を手渡すなどの配慮が必要である。

妊娠期からの支援強化として検討した内容は、ア) 母子健康手帳交付時に妊娠期の支援（妊婦教室と家庭訪問）を紹介しながら、特に、妊婦教室についての希望を明らかにする。イ) 多胎妊婦については、「双子の手引き」を手渡すだけでなく、内容を紹介できるようにする。また、双子サークルや家庭訪問を紹介する。ウ) 多胎妊婦が双子サークルに参加する場合には、サークルリーダーと一緒に、双子ならではの妊娠や育児について話せる時間をもつ。以上、3点だったが、その後、一般住民である多胎妊婦からの妊娠の届出はない状況にある。安全に遊ぶ場の提供では、今ある遊び場（児童館や保育園の園庭開放）の情報提供などは随時行っている。金銭面の援助については、多胎児のみならず育児支援全般になるが、今年度より妊婦一般健診受診票の枚数が増えたり、乳幼児医療費助成の対象年齢が引き上げられたこともサポートになると思っている。1) で把握したニーズについては、保健師だけで解決できる問題ではないので、今後の課題である。

IV. 看護実践の方法として改善できたこと

今年度の課題として、プレパパママ教室開催に

あたり、開催市以外の参加者のみであることが続いたため、他地域の保健師と助産師、看護師、多胎児サークル、大学教員が話し合いを持った。その結果、単独の市町村だけではなく、広域の市町村が協力し支援を行っていく必要があるという意見で一致した。今後、広域の多胎妊婦を対象にすること、開催場所は持ち回り制で開催することを決定した。また、他市の共同研究者同士の取り組みについて共有することができた。

V. 現地側看護職者の受け止め

行政、医療施設、サークル、教育の協働により、様々な視点から意見交換を行い、多胎妊婦およびその家族をサポートし、それぞれの担う役割と連携の大切さについて考えることができた。地域同士の協力体制については、早急に対処する必要があるという意見で一致した。また、今後、定期的に話し合いを設け検討をしていく予定である。

VI. 考察

多胎妊婦とその家族は、妊娠期から喜びと不安を抱えて過ごし、育児期に入ると不安が現実となることが多く、様々な支援を必要としている。そのため、不安や疑問を解決、もしくは最小限にし、安心して妊娠期を過ごすことができるよう支援を行っていくことが重要である。必要としている支援の把握、妊娠期から育児期にかけての継続的支援、個別の対応など、多胎妊婦とその家族へのニーズに即した支援の更なる検討が必要である。

A市における取り組みは、今年で3年目になり多職種間やサークルの連携も密にとることができ、定着してきている。参加者が開催市以外のみであるという課題もあったが、広域での多職種間の話し合いにより、他地域の協力を得ながら今後も継続していくことになった。多胎児が増加しているとはいえ、地域毎にみると少ない状況であり、困難な点がある。よって、今後、十分な支援を行うには、他地域同士が情報の共有をし、協力し合うことは必要不可欠である。また、多胎妊婦に多い里帰り分娩などによって、情報提供が不十分になりがちな病院と地域の連携についても取り組んでいく必要がある。

VII. 共同研究報告と討論の会での討議内容

1. 各地域における多胎児支援の現状と取り組みについて

本研究の取り組んだ3地域について、それぞれ詳しく説明し、その後、質疑応答を行った。

A市においては、中核病院への入院が他地域から多くみられる。そのため、里帰りなど出産後の支援が行き届かず、困る対象が多い。よって、妊

娠中から育児期の継続した支援、サークルの紹介や出産後の家庭訪問を充実させることが必要である。

B市では、妊娠期からの取り組みとして、家庭訪問をできるだけ行っている。外国人の方も多いため、その対策としては、家庭訪問やメールでのやり取りによって、リアルタイムに直接コミュニケーションが図れるよう工夫している。

C町では、妊娠期と育児期のニーズの違いをとらえた的確な支援を行っていくことが課題として挙げられた。また、妊娠期と分娩期でのニーズの違いについて質問があった。

また、この3地域以外からの説明もあった。3～4年前から月1回の自由交流会の開催や、講師を招いての交流会も行っており、他地域からの参加も可能であるなど、各地域それぞれが工夫して支援を行っている状況であった。

2. 地域間、多職種間の連携方法

地域においては少数である多胎児家族の支援を、各地域が行うには困難な点が多く、広域での協力が不可欠であるため、今後、情報を共有しあいながら進めていくことが望まれる。また、産後の支援をより充実させることが求められており、妊娠期から継続した支援を行う必要があるという意見で一致した。

地域から医療機関、逆に医療機関から地域への情報提供とその共有については、妊娠中から育児期への支援を行う上で、必要不可欠であるため、密に連絡を取り合うことが必要である。

文献

- 1) 財団法人母子衛生研究会：単産-複産（複産の種類）別にみた年次別分娩件数及び割合（平成7年～平成16年）、母性保健の主なる統計、母子保健事業団；58、2005。
- 2) 服部律子：乳児期の双子を持つ母親に関する分析と考察、ペリネイタルケア、21(8)；78-84、2002。
- 3) 藤原由美子、藤原由美、須山由梨子：多胎児をもつ母親の育児に関する産前・産後の悩み事、日本看護学会論文集母性看護、35；137-139、2004。
- 4) 尾前沙織、谷尚子、安代晋吾、他：双生児を育てる母親の生活実態の検討、藍野学院紀要、19；59-66、2006。
- 5) 服部律子、布原佳奈、名和文香：地域における行政と育児サークルが協働で行う多胎児支援、岐阜県立看護大学紀要、7(1)；29-35、2006。